

芦丈翁三十二回忌  
記念誌

猫 蓑 会  
都心連句会  
共編

# 芦丈翁三十三回忌 記念誌

## 目次

現代連句の父	東明雅	2
芦丈先生の状差し	土屋実郎	3
芦丈先生「十六行」のこと	村野夏生	4
百擲み	根津美紗	5
百韻	担当 倉本路子 橘文子	6
図版		10
芦丈翁年譜		20
式次第		24

# 現代連句の父

猫蓑庵 東 明雅

芦丈先生は加賀の北枝から始まって希因・闌更・蒼虬・芹舎・凌冬と流れて来た伊勢流俳諧の第八代宗匠であった。しかし、先生の代表的作品『山一重』（昭和六年刊）などを見ると、「その句朗々、その韻洋々、元禄の英を含み、天明の華を唱ひ、之を行るに、昭和の文物を以てす」と贅川他石により評せられている通り、田舎蕉門と言われる伊勢流とは、似ても似つかぬ高踏・脱俗の目ざましい俳風であった。

先生が「七部集」の中でも、ことに「冬の日」を愛しておられた事は、拙著「芦丈翁俳諧聞書」（六十九頁）に、先生自身語っておられる通りであるが、「冬の日」以外の七部集、また蕪村の「一夜四唸」・「ももすもも」などの名作を味読し、また去来の「去来抄」・土芳の「三冊子」・許六の「俳諧問答」・几輩の「附合てびき蔓」など一流の俳論書を読みこなして、初めて到達された俳境で、昭和十二年には先生畢世の傑作とされる「下蔭三吟」が完成・出版され、先生の名声も定まったのであるが、これは先生が男盛りの五十歳の時であった。

先生を現代連句の父と呼ぶのは、先生がその後四十五年も生きられ、しかも弟子を直接教える外「山襖」という連句雑誌を作って後輩を導かれた為であると思っっている人が大部分であるが、現代連句の大道を示したという意味で、五十歳の時から現代連句の父だったのである。

# 芦丈先生の状差し

抱虚庵 土屋 実郎

誠に残念なことに、私は芦丈先生の警咳に接したことがない。ただ瓢左師が芦丈先生を「吾師さん」と呼び、敬愛の情をこめて居られたことから、その風貌を想像するのみであった。今般、明雅先生から三十三回忌の記念事業につきお話があり、私共都心・湘南でその作品集刊行を分担することとなった。世に、芦丈先生の連句作品は三千巻と称されている。今、その作品はどうなっているのか。「ともかく根津家を訪ねよう」ということで、静司さんと伊那にむかったのは去年の六月であった。作品はご子息、故忠二さんにより完璧に整理されて居り、孫の美紗さんによって立派に保管されていることが判った。展示のための遺墨や作品の一部の借書も快諾され、昼食のご馳走をいただきながら、長押の方に目をやると、一間ほどもあるうかという長い木造の状差しが掛かっている。墨書で南信・北信・奥羽・関東・北陸・東山・東海・近畿・山陰・山陽・四国・九州と区分けがしてある。聞けば先生の手作りで、ここが先生の居間であったという。一瞬、私は電撃のようなものを感じ、これが日本中の連衆との風交三千巻の発信地であり、原点であったのかと感慨一入であった。そしてまた、抱虚庵の末席に列なる者として、身の引き締る思いであった。

# 芦丈先生「十六行」のこと

爛柯主宰 村野 夏生

○新宿の三階小屋裏で根津芦丈先生の「十六行」を紹介する文章に出会った。

○鴻沢四丁アテ。連句鼓吹の爲十二行考案試作を示したのに対する返事。「連句は歌仙に上越すものは無之候へども、小生ハ寧ろ、十六句。

(一) 表四句裏四句以上二折。二折も回数。

(二) 月・花。

(三) 春秋二句より三句迄。

(四) 夏冬、句より二句迄。

(五) 総て三句去り

(六) 表に神、釈其他、嫌ハぬハ、外の短いものと同一。

(七) 起句、春の場合は脇か第三に花をする事。もし出来ぬ時は二折七句めに別の季の花をする事(冬季に正花あり)

(八) 月は、五句めを定坐として、起句に秋以外の月の出た場合は素秋差支なしとして出来るだけ四季を欠かぬ事。

こんな事にすれハ雑句も相応にあるから、あまり究屈でもなからんかと存候。」(根津芦丈書簡より見た現代連句形式の一試考)「懇道」昭和五十二年十一月第四号所収(三浦隆より)

○歌仙の簡素化、実にここに極まれり、だ。

○新人がまさに悩むところ、表六句のタブーをズバリ切り捨ててこそ小気味いい。

○総て三句去り、と明快。四季にも雑句にも相応の気配りあって自由だ。

○そして次の一行がいい。

「川連句の不合理や非科学的の処は芭蕉翁の心法にてどんどん改めて行けば差支なしと存候。小生なども諸制約や氣に入らぬものはちつとも守り不申云々」……以下略・全書

○書簡日付は、昭和十年三月。十二年の一月には三吟歌仙集「下蔭三吟」を刊行している。

## 百擱み

芋庵 根津 芙紗

「なんだ、われは糞擱みかアハハ」。祖父は「俺の手をみる百擱みだぞ」といつて自分の手を見せた。大きな手だった。三十三回忌に当りあの百擱みというのはこの世からあの世へも続いているのだらうか。年忌の度に人々の手を煩して追悼してただけるなんて本当にありがたいことだ。死んだあとの幸福もあるのだとつくづく思う。掌にある横一文字の筋この手相のものは米銭に恵まれるという。金銭花取る風の手や百握り“蛙井集。それじゃ糞握りもあるのかと調べたら掌の太い線が横に通らず斜めに切れているもので貧乏な手相、とある。やれく。百擱みは百握りのことなのだ。方言専門の方に尋ねた。「何をさがしても出ていないが、諏訪地方の方言“にありました」との返事、諏訪から伊那辺の方言なのである。私がこんな所に居たつてことは百握りの隅に擱ってしまったらしい。

いま健康のあれこれが盛んだが、年よりも良質な蛋白質が必要だとか骨が弱くなるからカルシウムが大切だ、海藻もいい、酢の物は血流をきれいにするとか、腹八分目がいいとか、常に聞かされていた、言ったり書いたりした言葉の一つ一つがいままも生きていることは、何よりもうれしいことだ。

東先生はじめ多くの方々にご苦勞おかけし誠に申し訳なく、心より御礼申し上げます。

芦丈先生三十三回忌 追善付廻し百韻  
脇起り 花乞食

担当 倉本路子  
橘 文子

雲よ霞と六十余年の花乞食

芦丈仏

神三柱玉手さし枕まく

原田 千町

腰の矢立の温き手触り

大林 柚平

をんなより恋を告ぐるははしたなし

小張 昭一

上り鮎魚梯溢れんばかりにて

土屋 実郎

時代を映す律法の数

高津明生子

開け放たれし窓のコーラス

大窪 瑞枝

雪嶺を渡る鹿教湯の月皎々

秋元 正江

屈きたる新車カタログテーブルに 上月 淳子

上月 淳子

婆はお達者別珍の足袋

米谷 貞子

経木包みの田舎饅頭

倉澤 友子

背を伸し音吐朗々狂言師

吉沢てるよ

月に得し宴の趣向語り合ひ

杉内 徒司

カメラうつりがいつも気になる 山口みづゑ

葡萄酒醸す甕の乾拭き

豊田 好敏

フェアウル追ひ敵のベンチに倒れ込み 代田敬一郎

鳴高音古都の老舗のいろは蔵

菅谷 有里

河川敷から渦をまく風

吉池 保男

パートの娘英語上達

杉浦 ちゑ

源流の水枿検査夏ざくら

根津 美紗

紺碧の空のひろさの野に憩ひ

穴澤 篤子

駒の足搔きに蚯蚓夢覚む

中尾 青宵

二の折り

御輿造る寄付の話に集ふらん

内田 麻子

人生の設計はまだ大試験

坂本 孝子

金の成る木をさがす国会

山崎 一忠

足の裏より希望湧き出づ

本屋 良子

口髭を手持ち無沙汰にいぢる癖

高瀬 美保

苦吟せし訳語を妻に尋ねしも

加藤 慶二

斜に置き換へ眺むタリの絵

下鉢 清子

テレビドラマが茶の間独占

加藤 治子

ひむがしの月に西にはタワーの灯

小林しげと

俺が道赤信号も悠々と

武村 利子

北の大路に唐黍を焼く

梅田 利子

冷房切つて月光に酔ふ

山口 良子

夫も子も捨てたる昔菊の庵

小出きよみ

深海の水母みたいにコケティッシュ

矢崎 藍

過去現在も絶えぬ色沙汰

蒲原志げ子

ぬらりと躲す百の告白

杉山 寿子

批評家も唸る力泳金メダル

八角 澄子

職場では雇用機会は均等に

吉田 憲助

名誉名声顛倒夢想

和田 忠勝

合せ鏡で禿を調べる

青木 秀樹

売れ残る内気な猫の伏目勝ち

和田 洋子

健康のグッズ並べて満足し

山口 美恵

詐欺師の舌のいよよなめらか

今村 苗

リニユーアルオープン洋菓子のお店

久保田庸子

耕しの鋤を休めて払ふ泥

若尾よしえ

かへり花・枝斜めに置く折敷

式田 和子

ハングライダー風光る空

金久保淑子

手斧納めの柚の柏手

村上 敦子

着膨れと着膨れ肝胆相照らす

岩永 極鳥

読みさしの本を枕に三尺寝

副島久美子

古い話は思ひ出に果て

柴山 寿賀

リストラを機にくぐる禪門

二村 文人

纜を解かれて船は荒海へ

藤沼 和恵

懐石膳面々揃ふクラス会

村田 富美

ところかまはず鳴りしケータイ

長崎 和代

たしか苗字は川ではじまる

浅賀 淑代

会議終へ缶コーヒを買ひに行き

須田 智恵

平蔵が盗みばたらき縄にかけ

八代 嫺

心にかかるいとけなき妻

篠原 達子

道中双六休み一回

吉村みこ

能面が怖いと泣いた春の宿

佛測 健悟

パソコンでこつこつ作るマイタウン

高橋 豊美

首さしのべて帰りゆく鶴

峯田 政志

退社時間だデート目くばせ

大津 博山

淡月にほろりとくだく家庭薬

中川 哲

恍惚のくちづけ長き池の端

池田 紅魚

明治の気骨持ってもっこす

神谷 安子

警邏の巡査苦笑して過ぐ

高島 幸子

乳牛のボス先頭に群れつくる

桑原 美津

迷子札血液型も書き添へて

秋山ようこ

トーテムポール人を吐く駅

加藤 道子

シナプス忙しく動きをり月

名古 則子

南米の山脈渡る風思ふ

鈴木千恵子

横綱がどんと受けたる花相撲

小林 静司

草笛の子の瞳清しき

五十嵐譲介

鯛より鯛名より実取れ

五味 蓉子

名残の折り

黒潮の色深々と変りける

中田あかり

地雷撤去へ通す信念

松本 碧

雪眼鏡してちよつとおすまし

権頭 和弥

故郷の姨捨山の今日の月

東 郁子

氷界の王子の閨へ滑り込み

橘 文子

風ひそやかに運ぶ早稲の香

小野 シズ

愛の遍歴華やかな墓誌

倉本 路子

高層の窓に虫籠吊すらん

市野沢弘子

へのへのの自画像今や高値付き

椿 紀子

小人の国に遊ぶ錯覚

青木 泉子

家紋浮べし大盃を干す

おたけんのすけ

ウォークマン次世代に希望託しつつ

中野 昌子

生涯に喰らへる飯のいかほどか

佐藤世止弥

いつも繁盛宝くじ店

近藤 守男

海亀の眼の碧く澄みたり

秋元 和彦

あく迄も性善説を貫きて

日高 玲

団扇手に寛ぐ従兄弟又従姉妹

緒方 健

引つ越し蕎麦をくばるのどけさ

今宮 水壺

グレンミラーの曲を流して

白井 瑛子

植多つぎし若木の花も咲きそめぬ

東 明雅

被災者へ救援物資続々と

和久井八重子

蝶の飛び交ふうるはしの空

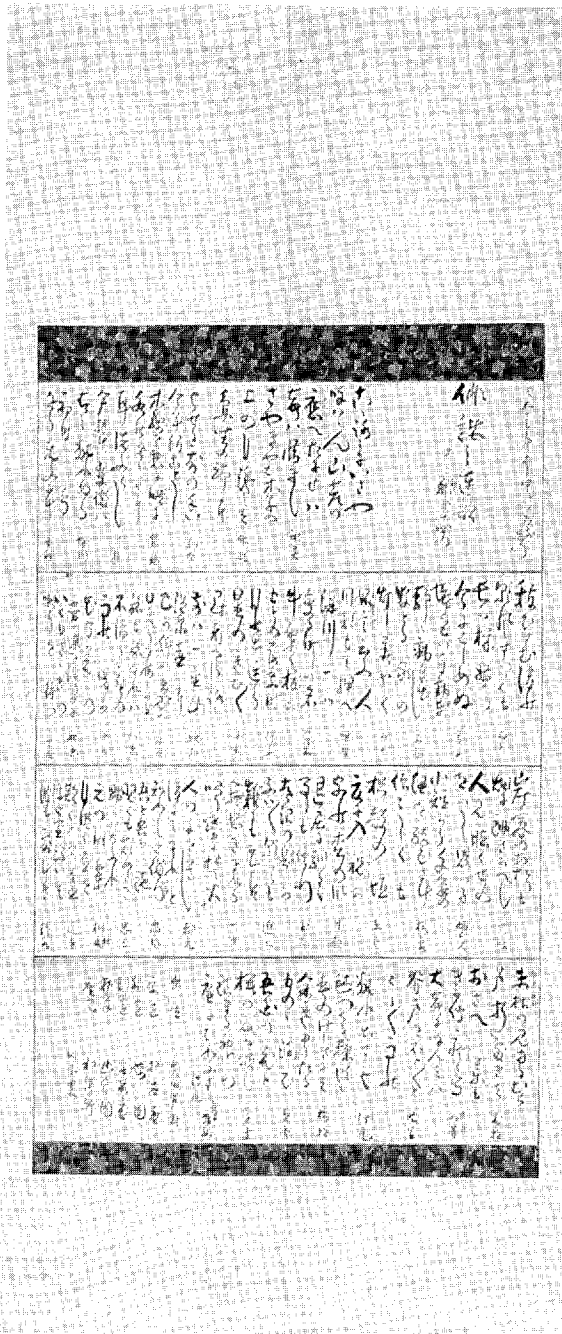
蛭海停雲子

起首 平成十一年三月吉日

満尾 平成十一年十月吉日

昭和十三年十一月十四日 於御広前興行

俳諧之連歌  
第三起り四十四行 ころみにの巻



ころみにいさや呼ハ、ん山彦の

應へたにせは声は惜まし 神靈

さやきやむ木草の上の月澄みて 竹邨

川座の端によせる露の香 瓢龍

今年組ことし木綿を襲に曠に 倍魏

水のひ、きに耳洗ふらし 一桂

簾捲けは翠微は青み翻れぬる 蛭川

初時鳥近う飛ぶかけ 勇明

被ひすむ後の朝風すかしくも 飛水

長か機嫌の今にはしめぬ 菱舟

蠟色の白動車静に動き出し 宗甫

嫁とる家の灯し華やぐ 五七

妬言言ふ人日顔もて押へ 唾聖

溝川一ツ変る町の名 箕石

牛繫く榎かもとの落葉時 行舟

月の出遅う星の寒むく 国彦

冠着をうしろに前は一重山 雅遊

温泉帝に己か脚の美を見る 孝谷

口かへりを惜しかる旅も旅なれば 松想

石濡らすほどの雨の暖か 曲水

花守か花の霧藻を誇りがに 秋香

いく日さ、ぎの囀りを待つ みさ雄

炭竈のあたりも畑に鋤きかへし 貞陽

人見臆くせのをかし賤か子 耦山人

小短かう文箱の紐を結びさけ 桜霞

仰々しくも枳殻の垣 東雲

夏に入祝か家の松の風 月嶺

退屈に馴る、事も修行 玉陽

遠沼の臭かふい、朝からも 近古

驟にもかけず八袂場さまれる 一才

鳴り燃ゆる焚火に人の手をかさし 都花

後にてそれと知れし御微行 尚風

吾と吾か鏡覗くも顔めたき 忠二

颯らはなぶれ元の朋輩 桐村

月明く昼を欺くはかりなり 逸堂

浮御堂浮いて波も露けき 静水

末枯の見ゆるむら芦折敷きて 花遊

おさへ葉もきかて疼く齒 月甫

大声に呼んては背戸をほとくと 晴里

とうく雨の翻れ出す雲 汀亀

毬つくる糠蚊も春のけしきにて 梅游

余寒ゆりたるもの、潤ひ 貞秀

吾国の花と桜の賦を頌し 蘆丈

鎮まる神の庭にひれふす 鹿残

満尾 抱虚庵

出座 真田男爵

宗匠 蝶園

脇宗匠 無聲庵

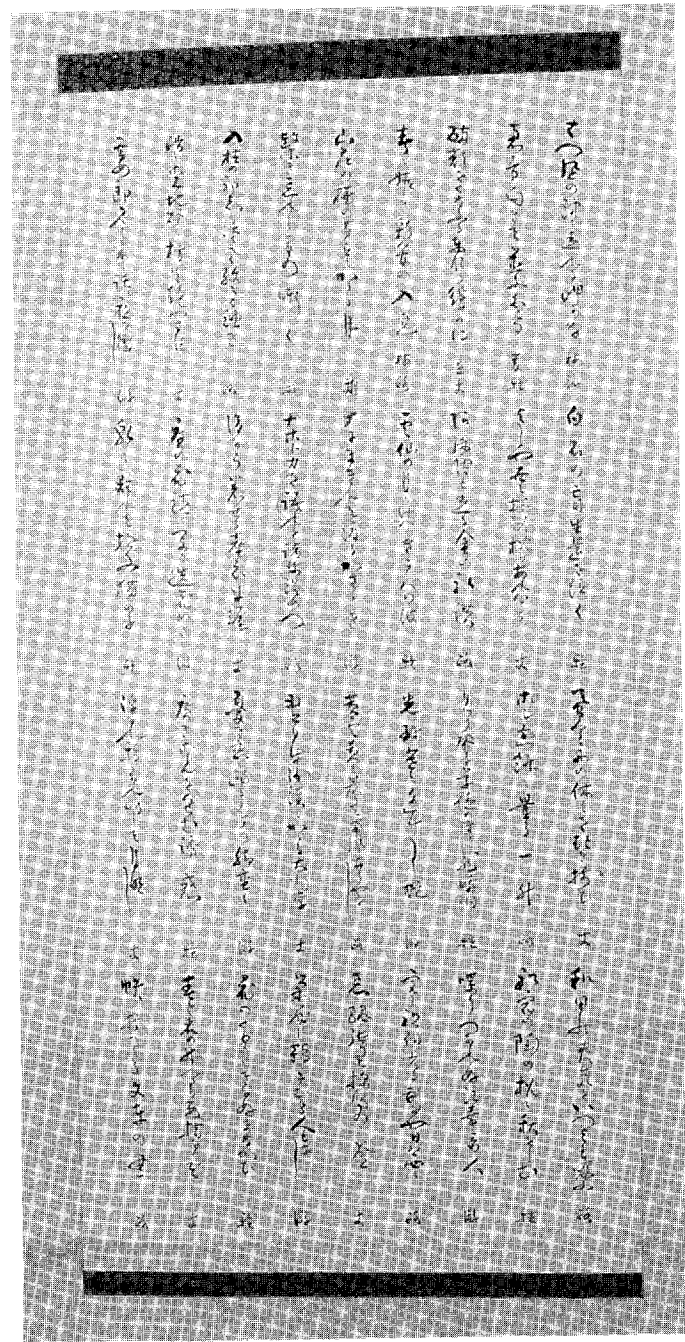
副宗匠 幽竹園

執筆 松濤軒

座見 以下略

註 ルビの片仮名は原本通り、平仮名は読解の為付した。

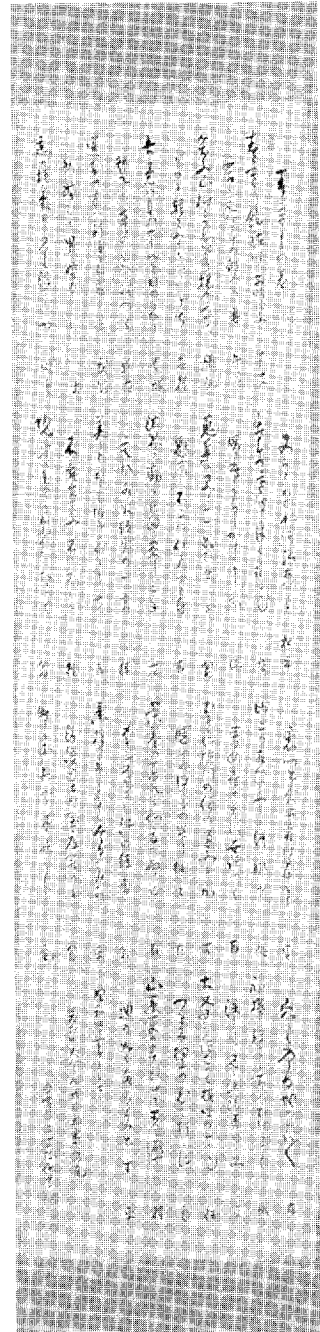
歌仙はつ風の巻



梅游	梅	はつ風の沖に走れる岬かな	梅游	蚕今舟の休みを起き揃ひ	丈
麦雅	雅	恵方向きて並ふ白鳥	麦雅	ポン煎餅に量る一升	路
蘆丈	丈	酔顔をくなふる東風の緩かに	蘆丈	リック背に学徒のき、し龍岨洞	雅
梅路	路	春に嬉しき彩管の入選	梅路	光琳笹に逃げし蛇	游
雅	雅	山荘の樺の芽立にかゝる月	雅	黄雲黄に戻りて南風ありやなし	丈
游	游	繋ぎ忘れし馬の嘶く	游	翌日は沙漠にかゝる大行李	丈
路	路	入植の初志に活くへく孜々と鋤き	路	憂き恋に踊るタンゴの脚重く	游
丈	丈	踏みこみ地炉に楷火絶やさず	丈	廣きホールを包む誘惑	雅
雅	雅	雪女郎見て来し話シ夜を徹し	雅	浮かれ鴉うかれ鳴して月明し	丈
路	路	白衣の盲生還を泣く	路	和田の爽気をいつ迄も吸ふ	路
丈	丈	よしや世に鶴の枕のあれはとて	丈	船宿の陶の枕に秋をしむ	雅
路	路	阿弥陀も光る金の礼讃	路	喋りつかれぬ浪華商人	游
雅	雅	雲仙の月にけはしきラバの波	雅	客ら祝詞上げる刻かや日は西に	路
游	游	厂にまきれて渡るかさゝき	游	忌繩張りて探湯の釜	丈
路	路	ナホトカを語れと諸味温めつ	路	巢籠りし鶴に矢むける人もなし	雅
丈	丈	後から着せる産衣半纏	丈	花のくもりにきかぬまなかひ	雅
游	游	庭の花鏡に写り造花めき	游	春と名の残れる日数指をりて	丈
雅	雅	乳を離れて拵ふ猫の子	雅	帙揃へたる文車の書	路



歌仙春寒しの巻



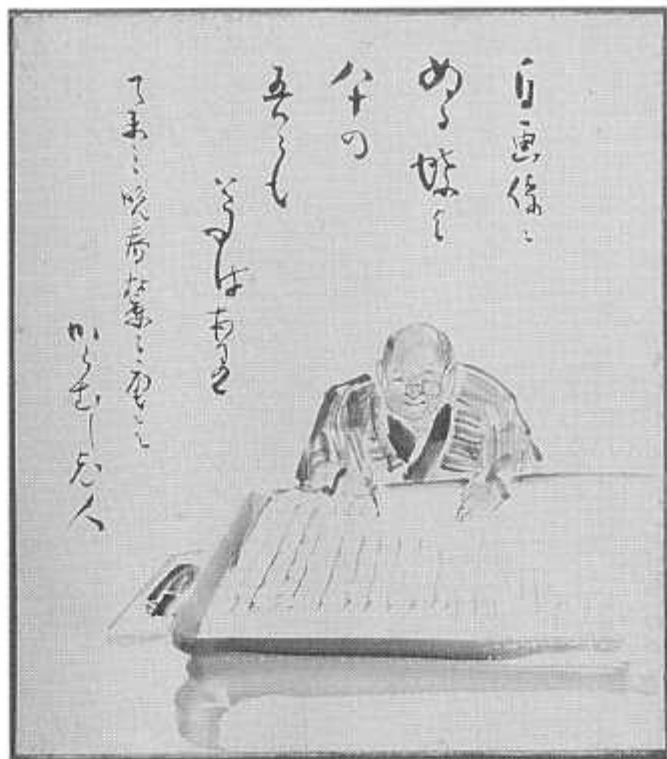
春寒し餌鉢叩て家鴨呼ふ	若文	空風水火須叟の一言	径	初獵に弾さし帯をひけらかし	城
霜くすべ焚けの觸れか再	牛耳	美しと言うて拍手花にうち	耳	流し目に見る流鏑馬の趾	平
笑ふ山樹々の息吹の揺れ見せて	雅流	石舞台てふ石に陽炎	径	古文書を読むのも趣味の一ツ也	平
リック軽々ハイキングどち	無徑	蜆汁に貧しき朝餉した、めて	翁	つまみ細工の花を巧みに	登
吾か宿は月のサイロを目のあたり	豊城	裏門出れば雲雀はるけし	平	山菜莢の春魁けて黄を萌やし	径
替へし畳の足に冷つく	瓢龍	岬二つ相抱くやうに湾の風き	径	油の如く水ぬるみ出す	平
送別の友は新酒を所望して	武翁	青女房の笑顔世話めく	耳		
女嫌ひに男嫌ひに	丈	ひそやかに横川の僧の通ふとか	丈	昭和四十一年三月七日	
恋の橋余所目に見るも浮雲しや	以登	暁けのほたるの光り細々	龍	農林中央金庫於日黒寮満尾	
又かと云はれ汚職あばかる	柚平	栄養の蓄へも何夏を瘦せ	耳	九十四叟蘆丈捌併書	
新年の寒波に月も水る也	龍	メキシコ目さし汗の練習	翁		
暖房きかしかるたとる室	流	茶柱の立たる事も今日のみか	平		
蒐集の品に一思ひ出が	翁	砂漠の王の宝庫開かる	翁		
魅されし不二に化大するとは	耳	新しく囿は興れと月妖し	平		
法界の動き巨細に察しかね	龍	穴にも入らぬ蛇ののろく	龍		

虚抱  
丈蘆

註 ルビの片仮名は原本通り、平仮名は読解の為付した。

■色紙

根津蘆丈先生壽像 画讃句



自画像ニ

ぬる蝶よ

八十の

吾にも

夢はあり

乙未之晩春麓之庵にて

からむし老人

根津蘆丈先生壽像

昭和三十年四月十日

高橋雲峰謹写

雲峰  
高橋

■色紙



俳三味

読初や

鶴の

歩ミの

連哥より

九十三 蘆丈

虚抱

文蘆

蹲居の石蓍咲けり朝茶の湯  
九十七  
八十七  
蘆丈

蹲居の石蓍咲けり朝茶の湯  
八十七 蘆丈

露路狭く紫陽花二茶後の陽のとくく  
九十一  
蘆丈

露路狭く紫陽花二茶後の陽のとくく  
九十一 蘆丈

雑魚二混りてほつりと龍の落し子か  
九十四  
蘆丈

雑魚二混りてほつりと龍の落し子か  
九十四 蘆丈

鏡鯛戸板平目市の声弾む  
九十四  
蘆丈

鏡鯛戸板平目市の声弾む  
九十四 蘆丈

# 芦丈翁年譜

年号	年月日	西紀	年齢	事
明治	7・12・27	一八七四	1	伊那村山寺に生まれる。
	18・12・28	一八八五	12	山園学校中等科六級卒業。就職まで家事を手伝う。
	26・7・1	一八九三	20	伊那郵便電信局に就職。
	27・1	一八九五	21	呉竹園馬場凌冬の門に入り、連句の指導をうく。俳句結社円熟社の正社員となる。
	30・1	一八九七	24	はじめ、生花庵青隣と号す。
	34・11・12	一九〇一	28	凌冬師より伝道の書をうく。この年、青隣の号を芦丈に改む。
	35・9・6	一九〇二	29	妻まつよを娶る。
	37・6・30	一九〇四	31	凌冬師急逝。
	37・7・1	一九〇四	31	伊那郵便電信局退職。
	41・9・11	一九〇八	35	諏訪郡平野村分(イチヤマカ)林製糸所に就職。
	41・10・31	一九〇八	35	凌冬七回忌追善集『砧のひびき』で円熟社社長翠幹を補佐編集刊行。
	42・1・9	一九〇九	36	上田町の旅舎にて下平可都三翁と偶然同宿、対吟す。他門との応酬のはじめである。
大正	3	一九一四	41	平野村諏訪倉庫株式会社に就職。
	4	一九一五	42	凌冬翁一三回忌追善集『露の秋草』を編集刊行。
	10・秋	一九二二	48	風交集『斧枕』を編集刊行。
	10・11	一九二二	48	
	12・10・16	一九二三	50	静岡市の松永蝸堂より連句に熱心の故をもって禾木、春湖、蝸堂と伝わった庵号抱虚庵を贈らる。
大正	7・5	一九一八	45	円熟社顧問となる。
	10・10	一九二四	51	9月逝去したる円熟社社長翠幹のため追善の句碑を建立、『桃の実』の一集を編集刊行。
	13・10	一九二四	51	妻まつよ死去。
	14・3・1	一九二五	52	如苞、如水、凌冬、那美女と四代にわたり愛用された一位の文台を那美女より譲られ、文台披露を行なう。
昭和	6・12	一九三一	58	後妻まさよを娶る。
	2・11	一九二七	54	『呉竹園遺稿』を編集刊行、乾坤二冊。
	7・2	一九三二	59	中村竹邨と連句集『山一重』を共著刊行。
	7・2	一九三二	59	諏訪倉庫株式会社を定年退職。
	7・9	一九三三	60	円熟社社長に就任(円熟社「結社録事」により記載。結社録事は芦丈自筆なり)。
	8・9	一九三三	60	伊那町山寺に草庵を建て、庵と名づけて移り住み、俳諧を主とした生活に入る。
	9・4	一九三四	61	伊那町狐林公園に門人有志の協賛を得て芭蕉碑建立。
	10・12	一九三五	62	翁碑建立記念集『麓の霧』を編集刊行。
	11・11	一九三六	63	円熟社月例句を年刊集に収め、一七年二月まで八冊刊行。
	12・1	一九三七	64	俳句集『寒句行』を編集刊行。
	13・11・14	一九三八	65	増田龍雨、中村竹邨との三吟歌仙集を『下蔭三吟』と題し、竹邨と共著刊行。
				松代象山神社鎮座正式俳諧奉納祭の宗匠をつとむ。

事 項

昭和	年号	年月日	西紀	没後	事	項
15	昭和	11	一九四〇	67	西天竜耕地の水利にからみ、諏訪湖の魚族研究の要あり、調査員として滋賀県、茨城県に出張、湖沼魚族の調査をなし、諏訪湖釜口水門に同湖魚族に及ぼす影響の問題にとりくむ。	
16		7・10	一九四一	68	伊那町町会議員に当選、二十二年四月まで二期つとむ。大戦中と敗戦後二年の激動期。	
17		1	一九四二	69	山寺区長を一年つとむ。	
18		9・28	一九四三	70	姨捨山上に松代十萬石吟社中門人により、寿藏の句碑を贈らる。	
24		11・1	一九四九	76	俳句集「此五年」を編集刊行。	
25		2・5	一九五〇	77	喜寿記念に中国、四国、九州行脚に出発。	
25		2・19	一九五〇	77	四十三日間の行脚を終えて帰宅。	
25		7・5	一九五〇	77	伊那町公園に門人外有志により寿藏の句碑を贈らる（この句碑は四十五年四月春日公園に移転）。	
26		12・5	一九五一	78	行脚記念「筑紫行」を編集刊行。	
27		9・5	一九五一	79	伊那文化財保護調査委員に任命さる（生存中）。	
28		4・9	一九五三	80	後妻まさよ死去。	
30			一九五五	82	芦丈連句二千巻満尾記念に、北信門人記念集刊行会により「芦むら」刊行。	
36		5・10	一九六一	88	米寿記念集「この一路」を編集刊行。	
36		6・17	一九六一	88	米寿祝賀正式俳諧を東京六義園内の心泉亭において、都心連句会主催により興行。	
36		9・26	一九六一	88	信州大学文学部において連句の講演及び実作指導をなし、その後信州大学連句会結成され、四十二年四月まで毎月、出張指導す。	
38		4・20	一九六三	90	田熟社創立八十周年を記念し、俳諧「草原集」を編集刊行。	
38		10	一九六三	90	連句俳誌「山襖」の発行を企画、三十九年一月二十三日第一号を発行、以後四十二年十一月まで隔月発行。	
38		12・9	一九六三	90	都心連句会主催の蕉翁二百七十年祭正式俳諧、東京松声閣に行なわれ、招かれて宗匠をつとむ。	
42		10・18	一九六七	94	病の床につく。	
42		12・18	一九六七	94	三十二年間つとめた田熟社社長を辞任。	
43		2・14	一九六八	95	芋庵にて死去。	
43		2・16	一九六八	95	伊那市西町弥生ヶ丘の長柱寺墓地に葬らる。	
43	昭和	4	一九六八	1	物故の際寄せられた追悼句並びに俳諧葬の連句等を一輯せる追善集を「山襖二十六号」として発行（田熟社）。	
44		2・16	一九六九	2	伊那市坂下公会堂において、一周忌追善俳諧田熟社主催により興行。	
45		4・26	一九七〇	3	信州松本市外浅間神宮寺において、信州大学連句会、東京都心連句会、松本俳句連盟合同主催による追善俳諧興行とともに全国俳句大会を行なう。関東、東海道、近畿より参加者ありて頗る盛会を極む。	
45		9・14	一九七〇	3	追善集「芋日記」発行。	

芦丈翁三十三回忌 式次第

司会 青木秀樹 蒲原志げ子  
日時 平成十二年三月二十六日 午前十一時～午後五時  
於 日本青年館 中ホール  
形式

- 開式
- 挨拶 猫養庵 東 明雅
- 挨拶 抱虚庵 上屋実郎
- 遺影に献花 連句協会会長 上田溪水
- 献盃 亭庵 根津美紗
- 挨拶 連句協会常任理事 小林しげと
- 閉式の辞 形式自由
- 連句興行 形式自由  
根津美紗様より皆様で一巻まいて下さるのが  
何よりの供養とのことでございます。
- 閉会 (午後四時四十五分頃)  
\*作品は左記へ四月中旬までにお送り下さい。  
〒277-0072 柏市つくしが丘二二一二二  
東 明雅 宛

芦丈翁三十三回忌 記念誌  
平成十二年三月二十六日発行 (非売品)  
編集・発行 猫養会 都心連句会  
制作協力 有限会社オフィスエルク